

寔れ蓑の日記

文政二年といふ年の卯月の十日まり八日の日、伯耆国米子に物すとて、去年の秋出雲の大神拝みに、物したりし

時の田蓑菅笠を今年の料にとて、納め置きたりけ

るを、取り出でて見るにいたう寔れたれど、去年の名残

と捨てがたう、思い出られて縫ひつづくりて、雨降らねど

例の人目忍ぶと取りきて立ち出づ。今度も安躬が送りに

とて来たりけれど、去年出立ちいであに若子源太郎わかごが稚い

けなくて、安躬に従ひて稲葉川の橋の元まで送

り来て、我が跡追ひしかんとて、泣きいさちたりしに

や都礼蓑乃日記

文政二とせと以ふ年の。卯月の十日まり八日の日。伯耆

国米子尔物春登亭。去年の秋出雲の大神を可み尔。物し

多利しと起の。田蓑菅笠を。今年の料尔と天。をさ免お

幾堂りける越。と里以で、見る尔。以堂うやつ連堂れど。

去年の奈ご里と春て加多う思い出ら連亭。ぬひ徒ぐく利

て。雨ふらねど例能人め志のぶとと里起て多ち以川。今

度も安躬可おく里尔と亭き多利気れど。去年出多ち尔若

子源太郎可以者气那くて。安躬尔志多可飛て。稲葉川の

橋能毛とまでおく利きて。王可あ登おいし可ん登て。奈

起以さ知多利し尔

打ち詫びにしとて、此度は物せず。稚けなきも一年ひととせ

添そひたればおよすけて、かねてこしらへ置きたれば、聞きわきて門かどの外とにて、快く別れぬ。

五月雨に濡れて朽ちなん去年の秋露にやつれし田蓑菅笠と、詠み捨てて行く。鳥取の大里の町を離れて、千代川を渡りて詠める。

河の名に立つ白浪ともろともに千代も通はん

命永らへ。湖山村、伏野村を過ぎ、内海村に來たりぬ。

去年の秋は、行くさも來くさも障ることのありて、鬼神に物せざりしを、此度は詣でつ。この頃疱瘡の病世

うち王び尔しと亭古多び盤物世受。以者気な起も一登せ楚ひ多連バおよ春氣て。可ねてこしらへおき堂れバ。きゝ王起亭加どのと尔て。古ゝろよく王可れぬ。

五月雨尔ぬ連て久ち奈んこ楚の秋露尔やつれし堂ミのす可笠。とよみ春てゝ行。鳥取能大里の町をは奈れて。千代川を王多里天よめる。

河能名尔立志ら浪と毛路と毛に千代もかよ者ん以の知な可らへ。湖山村伏野村。を春起。内海村尔き堂利ぬ。

去年の秋盤ゆくさもくさ毛。さハる事能あ里て。鬼神尔物世ざ利しを。こ多び盤まうでつ。此ころ疱瘡の病世

にほびこりたれば、このわたりの老いたるが孫を負い

若き女の嬰兒を抱きなどして、詣づる人多し。拝み

て詠める。おのれこのかさ(疱瘡)を病まざりければ、

いもがさ(疱瘡)を病まざる人は稀なるを稀なる数に

入るが賢さ。杖突坂を越へ、母木の宿、青屋の宿を

過ぎ、泊の宿に宿りて詠める。

かねてより思ひ定めてこの里に今宵泊りと

宿り求めつ。

十九日辰の時ばかり出で立つ。海べたを過ぎ、鵜谷(宇谷)

山を打ち越へ橋津、長瀬宿を過ぎ、由良の宿に来て乾飯

尔ほびこ利堂れば。此王多里の老堂る可うまごをおひ。

王可起女のみど里子を。以多起奈どし天まうづる人お本

し。を可美天よ免る。おの連此可さをやまざ利ければ。

以も可さ越やま佐る人盤まれなるをま連奈るか春尔以

る可かしこさ。杖突坂を古へ。母木ノ宿青屋の宿をす起

泊ノ宿尔や登利てよめる。

可年てよ里思ひさ多めて此里尔こよひとま利とやど里

もと免つ。

十九日 辰の時者か里出多つ。海遍多を春起鵜谷の山を

うちこへ。橋津。長和瀬宿を春起由良の宿尔きて可れ以

ひ

喰ふ。去年の秋物せし時、夏の頃より日照り続きで、
穀物枯れなんとするに、雨いたう降りて、しばしここ
に安らひしに、御民らの喜びし事思ひ出でて詠める。

天津水仰ぎて待ちし御民らが作れる年の

甲斐はありけり。八橋、松谷を過ぎ赤崎に来て、山崎政喜
が家を訪らふ。政喜は京に物してなきほどなれど、父なる
人のいたく留めければ宿りぬ。去年の秋出雲国に物せ

し時は、政喜を誘ひて今年もと契りおきしかど、

一声も聞かず聞かせず時鳥都島辺に立ち別れ

つるは、いと騒々しきわざなりや。

くふ。去年の秋毛のせしと起。夏能ころよ里日て利徒
起て。田奈つもの加連なんとするに。雨以堂うふ里天。

志者し古々尔や春らひしに。御民ら能よ路こびし事思ひ
以で々よめる。あまつ水あふ起てまちしみ多ミら可徒

く連る登しの可ひ盤阿里ケ利。八橋松可谷を春起。赤崎
尔きて山崎政喜可家をとふら婦。政喜盤京尔物し天奈起
保どなれど父なる人能以多くとゞめ気ればやど利ぬ。去

年の秋出雲国尔物世し時盤。政喜を以ざ奈ひて今年毛と
知起利おきし可ど 一声もき可須き可せ春時鳥都しまべ

尔立王可れつる。ハ以とさうぐし起王さ奈利や。